

日本建築家協会（JIA、芦原太郎会長）の「建築家大会2014」が9月25～27日、岡山市内で開かれた。「境界を越えて—総合化に挑む建築家の使命—」をテーマに掲げ、基調講演やシンポジウム、セミナー、コンペの公開審査など多彩なプログラムを繰り広げた。最終日の27日には、建築家の前田圭介、出江寛、坂茂の3氏による連続セミナーが行われ、各氏が建築に対する思いや今後の抱負などを語った。（編集部・須藤智子）

建築家3氏が連続セミナー

10/3 連続セミナー

JIA建築家大会2014開く

広島県福山市出身で地元を中心に活動する前田氏。「地方都市から世界へ」というテーマで、住民がふるさとに愛着を持ち、街が活性化される建

前田圭介氏 地方都市から世界へ



朽化したビルを建て替える計画で、「普通にビルを建て替えると、どこにでもある無機質な建物になりがち。街のシンボルになり、活気ある建物にしたい」という思いから、テナントが入る四つの部

で廃屋状態だったという。「藤井氏の設計意匠を復元するため、設計に3年を費やし、できるだけ既存の天井や柱を活用した」という建物は「後山山荘」と名付けられ、地元住民が憩いの場として日常的に利用するほか、団体の研修施設としても活用されているという。

最後に、前田氏が好きな禅語「明珠在掌（みょうじゆたなごころにあり）」を紹介。大切なものはすぐ近くにあるという意味で、「建築家としてその土地の良さに気付き、引き出すことが重要。地域に根差し、愛着を持ってもらえる建築や街をつくり、世界に発信していきたい」と締めくくった。

出江寛氏 建築とは哲学すること



日本の風土に根差し、伝統美を生かした建築を数多く手掛ける出江氏。「建築とは哲学することである。」と題して、独自の建築美学を展開し

月がたてば清潔感を失い、魅力が無くなってしまふ」とする一方、「古民家や寺院は古くなくても人を引き付ける魅力があり、こういう建築こそ美しい」と両者の違いを述べ、建物をつくる際は、どちらの建築をつくるのか初めにはっきりさせることが必要だと話した。

さらに、ドイツの哲学者マックス・ピカートの言葉から「沈黙は人間の心を癒す唯一のものであり、沈黙する建築をつくるのが重要だ」との持論も披露した。

た。竹中工務店に在籍していた当時、上司に「日本中のモダンな古民家や寺院を撮ってこい」と言われた出江氏は、訳も分からず日本各地の建物を写真に収めたいという。当初は「何がモダンで何が美しいのか分からなかったが、数多くの建物を見ていくうちに、築年数がたち古くなっても美

しい建築には独特の雰囲気があり、これがモダンなのだと実感した」という。建築美学について、「美しいは「きれい」とは異なる」と主張。「美しいとは、古くなって濁りや汚れを含んでも絵になるものであり、きれいとは衛生的で短命なものを指す」という。

「街中にある多くの商業施設やオフィスビルはきれいではあるが、美しくはない。年

